

したことは、今でも懐かしく思い出される。当日の会場で、平野さんから記念誌の発行が期限に間に合ったことに対して、ねぎらいの言葉をいただいたことは、大変ありがたいことで、苦労が報われたと今でも感謝している。

私だけではないだろうが、平野さんにもっともお世話になったのは、何といっても甲虫の同定である。過去に神奈川県内の市町村単位のファウナ調査が、あちこちで行われた時期があり、私もいくつかの調査に関わった。その中で、結果をまとめるうえで、最も重要な同定作業を、平野さんがメンバーに入っていれば、すべてお願ひすることができ、その他のメンバーにとっては、楽ることができ実にありがたいことであった。また、平野さんが関与しなかった、私自身の調査でも、同定の難しい分類群は、すべてひとまとめにしてお願ひすれば、すぐに結果を教えてもらうことができた。恐らく同様の経験をされた方は、全国に数多くおられるのではないかと思われるが、すべての甲虫類の同定をほぼ一人で完遂できてしまう点

に関しては、平野さんは本当に偉大な方であったと今でも思う。

病気になられる前、神奈昆例会の席上で、「終活を始めています。」と何回も発言されておられたが、その割には、あちこちへ採集に行かれ、さらには大部のトムラウシの報告をまとめるなど、とても終活を始めているように見えなかった元気な平野さんであったが、発病されてからは、車椅子の生活となられ、年齢のこともありお別れの日が近いことがひしひしと感じられた。今年になって、新型コロナウイルスの影響のため、お見舞に行くこともできず情報が途絶えた中で、突然の連絡により、一ヶ月以上も前に逝去されていたことを知り、その報を聞いた時にまったく信じられず呆然とした思いであった。添付した写真は、虫寿記念号の表紙に用いた写真の原板であるが、このように元気だった平野さんの姿を偲びつつ、心からの御冥福をお祈りしたい。

平野さん、ありがとうございました

吉富博之

愛媛大学ミュージアム

平野幸彦さんが亡くなつてからずっと、彼の膨大な業績の中でも一番は何だったのか、考えている。

平野さんを知ったのは、中学生の頃だった。地元の書店で偶然手にした「甲虫とつきあう本」(平野幸彦, 1985) は、甲虫を好きになったきっかけ

になり、ずっとバイブルとして読んでいた。大学に進学し初めて学会でお話しした時は本当に緊張した。ご自宅にお邪魔させ



平野さんの偉大な業績の1つ「甲虫とつきあう本」の表紙（中学生の時に購入した本はボロボロになってしまった。この写真は最近古本で購入したもの）

て頂き標本もお借りした。先の本には側面に分類群のスケッチが貼られているインロ一箱の写真が掲載されていて、ご自宅でその箱を見たときはあの本の箱だ、などと頗珍漢なことを言って平野さんに笑われた。修士論文執筆の際にはたくさん標本をお借りし調べさせて頂いた。マルハナノミは体が壊れやすく標本にしにくいから嫌いだと言われ、ちょっとショックだったが、思えば私も硬い虫の方が好きだった。

時は過ぎ、十川君とヨツボシテントウダマシの研究をしていた時、正体不明とされていたベニヨツボシテンダマを思いがけず再発見してしまった。何とか自分たちで論文化したいと思い、論文を投稿する直前まで極秘にしていた。特に平野さんと生川さんにはばれないようにしようとしていた。きっと彼らのコレクションの中にも入っているだろうから、気付かれると先にぱっと発表されてしまうかも知れないとの判断だった。原稿を投稿する直前にお二人に確認してから投稿した。そ

の後の学会発表の時、平野さんに話しかけてみるとちょっと機嫌が悪そうだった。無理もない、地元にも関係する面白い硬い虫の発見だったから悔しかったのだろう。申し訳ない気分になった。でもその直後に、亀澤さんからベニヨツボシの標本を貰ったとたん機嫌がころっと直り、満面の笑顔になった。ああなんだ標本欲しかっただけだったのかも、と思った。いつも人懐っこい笑顔を見てくれる人だった。

平野さんの偉大な業績はたくさんある。前述の本もそうだし、雑甲虫をメジャーにしたことも偉大な業績だと思う。それ以上に、何か記録する際に多くの情報をネット等で入手しそれを網羅的にわかりやすく解説するスタイル、それに尽きるように私は思う。彼の上の世代にも多くの偉大なアマチュア研究者がいて様々な業績が残されているが、いわゆる今風の研究スタイルこそが彼の偉大

な業績だったのではないかと思う。
ご冥福をお祈り申し上げます。



平野さんはいつもみんなに頼られていた（2011年の大会の同定会にて、中央が平野さん）

地域ファウナ分科会 —平野幸彦氏を偲んで—

藤本博文

〒760-0005 高松市宮脇町1-17-4

平野幸彦さんが亡くなられた。最後にお会いしたのは2019年1月20日、神奈川県立生命の星・地球博物館で行われた神奈川昆虫談話会の例会（神奈川県昆虫誌2018出版記念シンポジウム）だった。平野さんは闘病中だったが、奇跡的に病状が良くなられたとのことで車椅子で出席された。元気そうに手を振り登場されたが、そのお顔はすっかり瘦せてしまっていた。お会いできて嬉しいと思う一方で「これが最後になるかもしれない」という不安も頭をよぎった。その日以来不謹慎ではあるが、遠からず来るであろう、日に向けての心の準備も始めていた。それでも計報に接した際の衝撃は想像以上で、3ヶ月が経った今も決して小さくない穴が心に開いたままだ。

平野さんの存在を初めて知ったのは1990年代、大学生の時である。神奈川県産甲虫の記録を逐一整理、更新されている姿に、尊敬と憧れの念を抱いていた。月刊むしの「県別に甲虫は何種いるか（平野, 1987）」や「地域別に甲虫は何種いるか（平野, 1995）」、あるいは神奈川虫報の「神奈川県の甲虫は何種生息しているか（平野, 1992）」等の記事を

コピーしてはバインダーに綴じ、擦り切れるくらい何度も読み返したものであった。当時の私にとって、平野さんは雲上人の一人だった。

思えば、平野さんと初めてお会いしたのも小田原の神奈川県立博物館だった。1997年11月に開催された日本鞘翅学会（本会の前身のひとつ）の総会である。当時の私は大学院生活に行き詰まり、自分が何をしたいのかを見失いかけていたが「地域に生物種は何種いるのか」というテーマには興味があり、福岡市の離島、能古島の甲虫相調査を続けていた。この時は「地域ファウナ分科会」というものがあり、私はそれに参加した。

会は、まず平野さんが神奈川県の甲虫相解明の現状を紹介し、その後、参加者が各地のファウナ調査の現状を自由に話す流れで行われた。私も、熱にうなされた様に手を挙げ、たどたどしくも能古島の調査の話をしたはずなのだが、極度に緊張していたため内容は覚えていない。おそらく支離滅裂なものだったと想像する。しかしながら私を、平野さんをはじめ参加されていた方々は、にこやかに優しく受け入れてくれた。何にもなれずに消